

## 孫中山の革命と政治指導

—一九二〇年代の研究

横 山 宏 章

本論文は、一九二〇年代における孫中山の政治指導を研究したものである。孫中山は一九世紀末から革命運動を組織し、辛亥革命に成功した。初代の中華民国臨時大總統に就任したが袁世凱に奪われ、北洋軍閥の支配する軍閥政治が出現した。このため孫中山は再び革命に乗り出し、一九二〇年代には中国国民党を率いて広東軍政府を樹立し、中国共産党と合作して、国民革命を発動した。

いわば、国民革命における孫中山の政治指導を考察したものである。国民革命とは、北京を支配している北洋軍閥、及びそれと結託する帝国内義列強を打倒しようとする反軍閥（反封建）反帝国主義の民主民族革命であった。孫中山はこの革命目標を達成するため、北京の北洋軍閥及び帝国内義列強に反対する各種勢力を動員した連合戦線を築きあげた。だから、孫中山の政治指導とは、この連合戦線に結集した各種勢力に対する政治指導を意味する。

個別研究としては、次の七側面を分析した。

(1) 〔軍政〕……北京支配の曹錕に反対する段祺瑞、張作霖、あるいは広東軍政府を支えた客軍、そして国民革命軍の基盤となった黄埔軍校など、軍事勢力に対する革命動員のあり方を検討した。

(2) 〔財政〕……一九二四年に発生した広東商團軍の武装反乱を中心に、孫中山政権の財政逼迫及び商人層に対する政策を検討した。

(3) 〔党政1〕……国民党内に形成された太子派と元老派という二つの派閥を検討し、そこに見られる「建国方略路線」と「革命方略路線」の違いを明らかにした。

(4) 〔党政2〕……新しい孫中山の再出発といわれる孫中山の国民党改組、容共政策を検討し、それが必ずしも孫中山の「転換」を意味するものではないことを考察した。

(5) 〔労農〕……一九二二年の香港海員ストライキを中心に、



にたけ、それが彼の政治的權威を強化させることとなつたのである。

本論文の特徴は、孫中山の政治を、單なる彼の政治思想で語るのではなく、具体的な政治の実態を分析することによって、その政治行動から実証的に解明しようとしたところにある。

〔博士論文審査要旨〕

論題 「孫中山の革命と政治指導」

論文審査担当者 細谷 千博

皆川 洸

有 賀 貞

1 本論文の概要

本論文は孫文について、とくに晩年期の第三次広東軍政府（一九二二—二五年）を統率した時期を中心に、その政治指導の具体的な構造の分析を主眼としている。

孫文について、これまで多くの研究がわが国で発表されているが、従来の研究がとすれば「思想史の分野に閉込められすぎていた」ことから、申請者はその歪みを正す必要を強く意識し、「これまで比較的輕視されてきた孫中山の政治過程を分析し、かつその思想的側面をも政治的に再構築」すること、で、「現代中国が抱えている政治のあり方そのものを再検討」できるところではないかといった、孫文研究の新しい分野開拓への意欲を燃やしている。いいかえると、五四運動を境に孫文の革命思

想が転換し、それに対応して革命実践のあり方も変化したといつた、わが国学界のこれまでの主流的な見解（たとえば、藤井昇三、山田辰雄両教授）に対し、孫文の政治指導について、軍政、財政、党政、労農、外交といった多角的な断面からアプローチを試みることで、現実主義者としての孫文の新しい像を描こうとする。

まず、本論文の構成であるが、次の通りである。

序 章（情 勢） 軍閥割拠——中国国民革命の舞台

第一章（軍 政） 軍事勢力の革命動員——北洋軍閥・客

軍・黄埔軍校

第二章（財 政） 広東政權の財政逼迫と商軍団の反乱

第三章（党政(1)） 太子派と元老派の両路線

第四章（党政(2)） 広東の政治改革——国民党改組と容共

政策

第五章（労 農） 孫中山の労働者・農民政策

第六章（外交(1)） 反帝民族主義と広東海關閩余請求交渉

補 章（外交(2)） 中国国民革命と「革命外交」

終 章 孫中山の政治指導

第一章でとくに焦点があてられるのは、第三次広東軍政府のもとに集つた客軍（他省から流れてきた雇われ軍隊）の分析であり、客軍をいかに巧みに政治操作し、それによって孫文が自己の政治権力の軍事的基盤を築いていったかという点の実証的解明である。ここで客軍支配のために必要な資金源確保のために、孫文がさまざまな手段を行使した実態が明らかにされる。

さらに孫文が中国の政治的な統一過程での主要な敵を北京政権一本にしぼり、そのため北洋大軍閥との提携の構想をもち、粵浙三角軍事同盟の結成に乗りだしていった状況、すなわち、主敵の打倒のためには他の大軍閥との提携をも敢えて辞せずとする、マキャヴェリ的な現実主義戦略を進めていった、孫文の軍事指導を実証的に分析する。

第二章では、財政的苦況のため孫文の政治・軍事指導がどのような拘束をうけ、また財政的困難を克服するため、財政統一や通貨改革の実行をどのように試み、やがてそのため広東の商人層の反撥を買い、一九二四年一〇月に商団軍の武装蜂起を惹起するにいたった過程の実証的な究明がなされる。

第三章、第四章では、申請者は国民党内の派閥構成を一般に用いられる左派、右派といった概念ではなしに、元老派、太子派といった概念を用いて分類するが、ここで申請者は国家権力の奪取、中央集権国家の建設を当面の課題とする、廖仲愷を頂点とする元老派と、産業の振興、広州の経済発展を重視する太子派の対立といった図式を用い、両者の間に路線闘争が進行したと見る。この点で、「元老派は共産党との提携を進めた限りにおいては左派であったが、むしろ数多くの諸勢力と手を結んで政治目的を達成しようとする政治的選択は、伝統的な体質を持っていた。一方、太子派は共産党との提携に批判的である限り右派であったが、むしろ資本主義的市場を建設するためには革新的であった」とする申請者の指摘は興味深い。

これらの党内派閥、さらに共産党といった政治集団に対する

孫文の政治指導の特徴的な点として、申請者はこれを、「異った路線を決して一つの路線に統合し、その派閥闘争を止揚するというような方向をとらなかつたことである」といい、さらに「いわば各派閥に任務と役割を分担させ」、巧妙な分割統治を行っていたと説明する。この点については、申請者は終章で「遠心力型・バランス的統合」というモデルを使用し、若干の理論的説明を試みており、申請者の知的発展に新しいものが窺える。

第五章は、国民党のとった労働者・農民政策を共産党の政策との対比を意識して説明するが、孫文の指導の面は比較的叙述が少い。

第六章と補章は、この時期の国民党の外交を取扱ったものであり、孫文亡きあとの国民党の外交方針が「革命外交」へ傾斜していったのに対し、孫文の指導した外交運営は稳健で、実利的な成果を重視し、そのためには帝國主義列強との取引をも敢えて辞せないタクティクスをとったことを、一九二三年から二四年にかけての広東海關関余請求をめぐる列強との紛争事件をケースに分析する。

孫文の政治指導を、理念と実践の矛盾と統一に即していえば、申請者の結論はこうである。「徹底した現実主義、つまり政治的有効性を追求することが、崇高なる目的を達成することに他ならないという考えがあり、現実志向の伝統主義の有効性を貫くことが、他ならない未来志向の革新主義の達成に導くという論理であった。であるから孫中山にとって、現実政治の追求

は決して理念の放棄であるとは考えられていなかったのである。』

## 2 本論文の長所と問題点

まず長所であるが、次の三点をまずあげるとは妥当であろう。

第一に、はじめて具体的に孫文の政治指導の基盤を分析した点である。周知のごとく、戦後の近・現代中国史研究が、革命史、とりわけ思想史的アプローチに偏っていたということができ、ある意味で、戦後三〇年間、わが国の中国研究者は、公式に発表された『毛沢東選集』、および、これに立脚して書かれた「正統史」の拘束から免れていなかったともいえる。しかし今や中国研究は、当時作成された原資料の発掘、統計数字の再整理、具体的な制度・組織・政治過程の分析を抜きにしては、その実態は解明できない時期に来ている。その意味で、本論文が、具体的な広東政府の財政的基礎、中・小軍閥の経済事情、国民党内の派閥関係の政治的背景などを明らかにしたことの意義は大きい。

第二に、前項との関連において、従来用いられていなかった新資料を開拓したことである。すなわち一九六〇年代より多くの新しい資料が次々に研究素材となってきたが、本論文は、新たに香港華字日報有限公司の『華字日報』、上海時報館の『時報』などを使用し、特に広東を中心とする「客軍」の動向分析に新しい分野を開拓した。これらの事実、当時の在華邦

字誌（『支那時事』等）によって部分的に報道されていたものであるが、原資料による実証的な分析は、これまででなかったものである。

第三は、国民党史研究に重要な貢献をした点である。従来わが国における国民党史研究は、中国国民党員の特定の立場からの概説、および、これらに立脚しつつも汪精衛政権評価の立場から資料を再整理した波多野乾一『中国国民党通史』に依存するところが大きかった。しかし、中国の実情は、正式に採択された文書、正規の機関、人的構成などをめぐって諸説入り乱れる有様で、具体的な政策決定の過程などについては極めて情報が乏しかった。本論文は、孫文のリーダーシップ解明の見地から、一九二四年一月の中国国民党一大大会関連文書を検討し、すでに山田辰雄『中国国民党左派の研究』が解明したことと部分的には重複しているものの、より詳細に当時の孫文と党機関との関係を解明している。

さらに長所についてのべれば、本論文は、孫文における「革命方略」と「建国方略」の両側面を「元老派」と「太子派」の対立に反映させて統一的に把握し、他方、国民党改組の制度論的再検討、「広東商団軍」の反乱の不可避性を明らかにするなど、中国研究の現段階に多大の貢献をしている。また、論文全体の論旨も一貫しており、新しい解釈も所々に見られ、申請者の研究者としての能力を、十分に示している。

しかし、政治外交史または政治学の論文として見た場合、問題点も少なくない。

第一に、孫文のリーダーシップの分析は、合従連衡的なバランス感覚、および、財務的リアリズム感覚に集中し、三民主義、とくにナショナリズムにおける独自性とその意義はほとんど検討されていない。

第二に、孫文が、黄興・宋教仁ら「国粹派」といわれた人々に対して「国際派」と呼ばれた特質は、ほとんど分析されていない。この点は、思想史上の重要課題であるだけではなく、人脈関係、伝統的勢力との関係、政治的プレステイジの問題などと関連し、政治過程論的アプローチの場合にも欠くことができないものといえよう。

第三に、従来のいわゆる『正統的革命史』を意識するあまり、国民党内の諸派閥、客軍、西南中小軍閥、北方大軍閥、そして中国共産党、政治力学の次元でのみ論じていることも問題である。孫文における「知」と「行」とを全く分離した形で論じているが、この申請者の「中国革命思想」理解の方法に問題があ

るようである。当時の中国において革命思想が政治力学の次元で現実機能した時代状況を、より深く分析することが必要であろう。

さらに、上記と関連して国際環境、とくに列強の対華政策の分析を欠いている点も問題であろう。

### 3 結論

以上指摘したように、本論文にはいくつかの問題点があり、申請者の研究者としての一段の成長に期待する点が多々残るにせよ、本論文を、現在のわが国における中国政治外交史研究の水準から見ると、すぐれた学問的貢献を行ったことは疑いない。よって所定の試験成績をも併せ考慮し、一橋大学法学博士の学位を受けるに十分値すると認定する。

一九八二年二月一〇日